

# 七年史

上·下卷

北原雅長輯述



して、遂に茅屋を見る。之を訪ふに一人の農夫あり、荷を負ふて將に行かんとす。呼  
で地名を問ふ農夫が曰く、大島原なり。余曰く、汝何處に往くや。農夫が曰く、敵已に  
迫らんとす。故に難を避く。余曰く、敵決して此地に出でず。汝等恐るゝと勿れ。余今  
石筵より来る。然るに小徑數十人の足跡あり。汝其人を見すや。農夫が曰く、軍人數  
十此地を過ぐ。何人なるを知らず。余曰く、空腹既に甚し。食餌あらば與へよ。農夫が  
曰く、只濁醪あるのみと。大椀盛來る。余之を傾くる二椀。忽にして満身暖を催ふし。  
鶯衣蒸氣を發し。煙中に在るが如し。行くこと數十町にして、秋元原に到れば、人家  
十四五軒あり。近づくに及んで數多の人聲を聞く。行きて之を見れば、大鳥圭介丹  
羽丹波、田中源之進等閉塗して散兵と共に飯を炊き、芋南瓜蘿菊等を煮て喫食す  
る處なり。相見て其無事なるを知る。余も其一飯を受て、午の刻共に秋元原を發し  
たり。

雅長亦其一人なり相失後の事實を詳悉して敗軍の難難を説べし其高草盡くる處深林に入る單身荆棘高篠を分ち偏に西北に行く磁石器を好伴とし懸崖は乃ち葡萄蘿を杖として下り前岸は乃ち樹根を攀ぢて上る時已に薄暮微雨蕭條絨衣を透濕して全身水中に在るが如し腰間一足の草鞋と數片の麪包あり石に躡して溪水を掬し僅かに空腹を慰す尙ほ溪を越え巖を攀る者數回暗黒行く可らず是に於て大樹の曲立する者を撰び藤蔓を研て之に纏帶し熊猿を折て其間に挿入し漸く身を容るゝ地を作爲し其大樹を負て憩ふ疲勞覺ゆず眠るが如く又覺るが如し遙かに南方の天を望めば火炎雨雲に映じ砲聲殷々たり想ふに本地小屋以南村落の兵火なるべし天漸く白し又深山を横行して擇ぶ處なし苦楚難艱備さに臻る溪流あるに遭ふ以爲く水末必ず平原に出で人境に近付べしと意を決して溪水を歩す行數里溪水稍平なり忽見る溪畔玄木を架して橋の如きを岸を上りて之を檢するに果して橋にして數十人通過の跡あり之に從て行こと數十町溪河幅員七八間なるあり而して其前岸は全く深林を離れて漠々たる高聳石筵山頭の如し溪水股を浸し辛うして前岸に上れば行人の足跡彌々多く

內容見本  
(70%縮小)

0%縮小)

といへる男兒と也けり、白川の役に左の股を打れて、弟の莊司も歸りて治養し、妻の房子は八月廿二日子を産みて、櫛に伏し居たるに、廿三日城下に迫りぬと聞えしかば、莊司云く、皆家を出て敵を避くべし、余は步行も叶はねば、此處に在りて腹切らんといふに、母之を聞いて、盡く家に死なんのみ、いかで傷者を棄て敵を避くるの道あらんやと云ければ、莊司はさらば駕籠に乗て諸共に遁れんとして、下男の清藏外一人をして駕籠を昇しめ、母は壽と萬之進とを誘へ妻は赤子を懷にして城に入らんとせしも、敵に阻られて入る事能はねば、暫く立止まりしに、莊司水を霑めければ、母立寄て見れば、腹切たる也しかば、母いそぎ河水を掬して與へければ、呑了りて死たれど、埋むべきの追あらねば、心ならずも棄て、城下の西に走り出たりけり、或は寺院に宿り、空屋に寝て、辛苦至らざるなし、清藏常に從て介抱しけり、町野源之助が母は勝子の姉なるが我家の婦女と、町野忠次郎が家の婦女とを連立て來るに逢ければ共に勝方村に至りて、某寺に在りしに、町野の下男駆來りて、敵已に近付たり、御城も落たりと風聞仕り

杯も、入得ぬ程の急劇の籠城也しかば、城中糧食空くして、只君家一時の食料、自米六七俵に過ぎず勘定奉行和田勇蔵大に之を要び下役人をして、二の丸の社倉を開きて見れば四五百俵有しかば、農兵を使用して、本丸臺所前なる漬物藏に運ばしめて、其玄米を炊き、兵食に宛たり、其后數名糧米運輸の命を受け近村の社倉米を運び、市街より米噸を城中に入れ、其他食器需用品に入るゝ者數人、奔走して城中に運送しければ爲めに食に乏しからざるを得たりし也けり、曰杵なども、持運來りて搗たるもの有けり、

兵糧の焚出しは、皆家中より入たる婦女子の手に成れり、臺所近く行見れば、門閥家の婦女が、白無垢に紋付着たるが上に櫛を懸、裙は高く掲げて、腰又は背に大小刀を差て、諸共に立働ける有様、いと／＼めでたかりけり、手負病人にのみ、白米の握り飯を與へければ、それ貰はんとて、患者の眞似し、見顕はされて、婦女の叱咤を受け、頭を抱へたる杯はいと興有て覺えし、

南摩瀬三右衛門が家は、一の丁に在り、兄弟三人共に從軍して有りければ、家には母勝子と、妻房子と、九歳になる壽と、四歳になる辛といふ二人の弟と、萬之進

文久二～明治元年の七年間を  
一切の私情を排し

会津側から克明に記述

マツノ書店

## (五一) 上記卯丁

を傳ふる者ありければ、戒心せられしなりと云ふ。會津藩士は、或は白丁を着け、松明を執りて、列に加はり、又は形を變じて奉送し、數千の兵士盡く出で、路に遍かりけり。御柩泉涌寺に達しければ、白衣雜色等白衣を被り、虎落假御門より御假屋に遷して、東面に置き奉る。公卿は南頬に、武臣は北頬に併列せらる。僧正等讀經し奉りて、燒香の御式あり。大將軍は後れて泉涌寺に御出ありて、柩後を拜して御還りありけり。肥後守容保は、殊に後れて座を起ち、支坊長福寺に入りて通夜し奉り、翌日至りて歸られけり。此日より五日間廢朝仰出されけり。

廿八日、大將軍は親書を尹宮に贈りて、宮の御參内を勧めらる。

二月朔日、大將軍は大阪に御起あり。佛蘭西人に面會せられんが爲なりけり。

五日、松平越中守定敬、稻葉美濃守正邦と共に、肥後守容保が官邸を訪はれしも、肥後守は病と稱して面會せられざりけり。二侯は大將軍の御内意ありとて、強て面會を求められしが、美濃守は筆硯を持來らしめて、携ふる所の扇に一首の和歌を書し、封緘して肥後守に贈らる。

心あひて結ひし中の友垣をあられぬ風のなと隔つらん

## (四一) 上記卯丁

は七葉の大輪なり。御屋根は、總て網代の栗色なるが、夕顔形にて、開き窓一つあり。御鏡戸と稱す。前面に白色の御簾を垂れ、金色の飾具を着けらる。内部は鈍色の縁を下げて御簾を鉤し、これに輪の紐を垂れ、御車の中より兩方へ下御簾を下げ、後方に鈍色の御引立二枚を敷きたるが、玉座にして、靈柩を納め奉る。烏襖は總て金色にして、轅間に狭めり。本牛を蓮華班といひ、先牛を天翠簾といひ、其前に在るを添牛といふ。牛數は牛車の重量によりて差異ありといふ。薄暮假御門を御出あり。御道筋は、蛤御門脇なる勸修寺邸の間なる新道より、烏丸通三條東へ、寺町通五條東へ、伏見街道を御通行あり。宮及び二條攝政殿、徳川大將軍慶喜公以下文武の百官在京の諸侯、盡く衣冠を着け、纓を巻き、徒步青竹を杖つきて供奉せられけり。從者各數人なり。此夜天候暗黒にして、細兩袂を露し、松明涙を照し、鹵簿肅然として唯車輪の軋音を聞くのみなり。道路屋内皆拜送を許されければ、御道筋は立錐の地なく、數萬の人民肅寂として一語なく、合掌拜送し奉りて嗚咽する者あり。雅長も御道筋に坐して拜送し奉りしが、自ら禁ずる事あたはず、謹で和歌を賦せり。牽牛の歩みも早き心持して御車遠く成にけるかな。 大將軍は俄かに病ありとて供奉の列を避けて御休憩あり。大葬の夜を待ちて變を謀る者ありとの流言

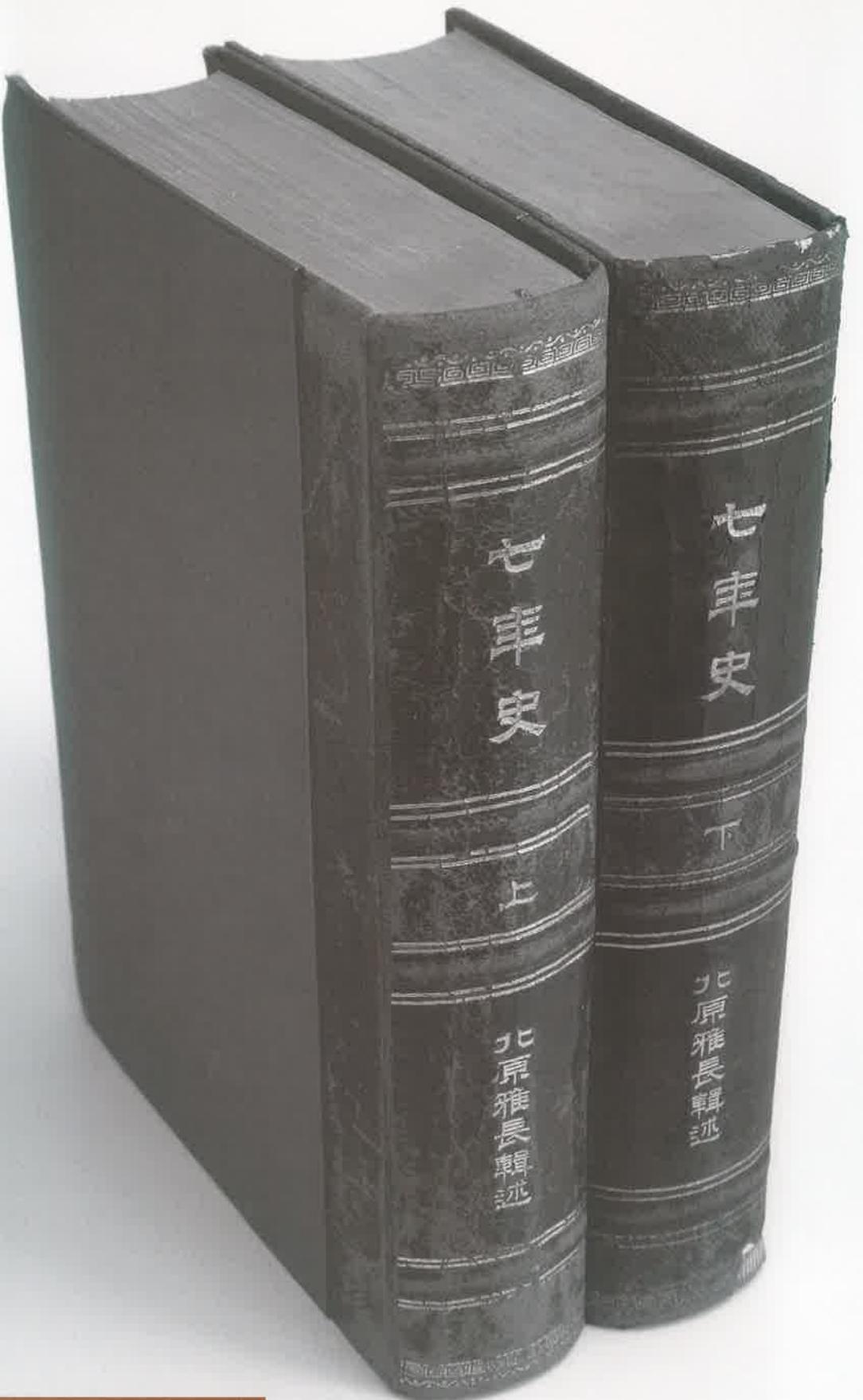
『七年史』に注釈をつけるために、初めて全巻に眼を通した。なにしろ分量が多いので、一読するだけで優に二ヶ月以上かかった。勿論、これまで『七年史』には度々世話をなつたが、最初から最後まで読み通すことはなかつた。恥ずかしいことだが、いわゆる読み食い的な利用の仕方にとどまつていたのである。

通読した結果、改めて、『七年史』最大の魅力は、著者北原雅長の経験による所大だと思った。北原は、会津藩士として幕末に上洛し、その後戊辰の役にも参戦した人物である。その彼の体験談（若松城での籠城話や会津藩が次第に対幕強硬派の標的となっていく話など）が何といつても面白い。私が本書を評価し、推薦する理由の第一はまずこの点にある。

また、通読したことで、ささやかな発見もあった。北原は、本書の冒頭で、「正確の事実を述る」ことに徹し、「みだりに」個人的な見解を記さないと宣言した。しかし、怜悧な人物であつたと思われる彼も、時に青年時のことと思い出して感極まり、痛烈な批評を付すことになる。無論、その祖先は、「天下の輿論」ではなく、自分たちの「私意」にもとづく王政復古を行なつた薩長両藩関係者や三条実美らの公卿に向けられた。だが、それ以上に、旧幕関係者への攻撃はするどかつた。すなわち、本書では、徳川の支族である元越前藩主松平慶永らの薩長への迎合的な対応や西軍に寝返つた彦根藩や米沢藩等の行為が、静かだが激しく批判されている。また、そこまではいかないが、最後の将軍となつた徳川慶喜に対しても、中々辛辣な批評が加えられている。朝廷から攘夷の実行を求められた慶喜がその不可を知りながら抗命しなかつたことや、禁門の変前の逡巡に終始した態度への批判などがそれに該当する。

慶喜は、公爵となつた後、自分が主役であった幕末期の歴史評価を確定する作業に主体的に係わつた。そして、丁度、その頃、北原から題辞を求められ、それに応じる。ということは、当然のことながら、『七年史』を熟読したことになる。私の興味をひくのは、慶喜は自分に向けられた北原の遠慮がちではあるが、抗議の弁を、明治三十年代後半の時点でどのような想いと共に受けとめたのかということである。同時に、『七年史』には、会津藩主の松平容保に対して語られた一四代將軍徳川家茂の慶喜への不信感も綴られている。將軍職を慶喜に譲ることに家茂が元来不本意であつたといった内容である。このような苦い、しかし紛れも無い事實を『七年史』から読み取つた慶喜は、老境にあつていかかる感慨を抱いたのか。興味はつきないが、徳川慶喜は、何ら感想を洩らさないまま、あの世へと旅立つたのである。

## 『七年史』を読んだ徳川慶喜 大阪経済大学教授 家近 良樹



明治37年刊行の初版特装本

■ 大変長らくお待たせ致しました。ここにようやく『七年史』のパンフレットをお届けさせて頂きます。

■ 復刻に際しては、上記の家近良樹氏がこのたび新たに作成される、本書の「注」を別冊添付致します。

本書原本には統一したノンブルがなく、復刻本に新しく記入するノンブルを基に「注」を作成につき、頁数は未定です。

■ 「装幀・毛利一枝」ですが、初版の雰囲気をそこでもそのままお伝えするため、本体表紙のデザインだけは初版の「特装本」に準じます。また初の試みとして、初版同様堂々とした「菊判」にします。それらのための価格への上積みは、一切しておりません。ご期待下さい。

■ 本書はこれまでの『会津戊辰戦史』『京都守護職始末』同様、福島県内すべての公共図書館へ献呈致します。そのため「限定番号」は入りません。

■ 体裁	菊判上製貼箱入	上下二巻
■ 定価	三万五千円(税込・円)	500
■ 予約特価	一万八千円(税込)	
■ 特価締切	平成十八年七月二十日(厳守)	
■ 発売	八月下旬	

### 限定三八〇部復刻

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13

08342295

マツノ書店

(セット特価は申込ハガキをご覧下さい)



# 名著『七年史』の復活を祝して

作家 中村彰彦

奥州会津二十三万石（幕末には二十八万石）は、徳川家の北の藩屏と自他ともに認めた雄藩であった。二代將軍秀忠の庶子にして三代家光の異母弟にあたる初代藩主保科正之が定めた「会津藩家訓」は、つぎのようになります。

「大君の儀、一心大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処るべからず」

將軍家に対しても、諸藩と同程度の忠義を励むだけでは足りないというのだ。文久二年（一八六二）、尊王攘夷運動の昂揚と朝幕関係の緊張を憂えた幕府が京都守護職を創設したとき、会津藩九代藩主松平容保に白羽の矢が立てられたのも、この「家訓」の文面がひろく知られていたためにほかならない。

幕末通には周知のごとく、同年暮に上京して公武合体の世の実現に力を尽くした容保は、鳥羽伏見の戦いに旧幕府軍が敗退するや一転賊徒首魁として追討される運命をたどった。本書の『七年史』という題名には、この文久二年から明治元年までの七年間の会津藩の歩みを克明に記述した史書、という意味合いがこめられている。

以下しばらく、本書によって初めて明らかにされた史実をいくつか紹介してみよう。

まず文久二年の政情を語る「第一卷 壬戌記上」「第二卷 壬戌記下」は、孝明天皇が容保を上京する前から好意的に眺めていた事実に言及する。「第三卷 癸亥記一」では、上京した容保が策を用いたと発言した家臣に対し「策略は正道にあらず」と色をなした光景が描かれる。

著者北原雅長、通称半助は容保の側近としてつねにかれに扈從していただからこそ、後世の史家にはとても書けないこれらのこととも記述することができたのだ。

さらに「第五卷 癸亥記三」の白眉は会薩同盟の下に文久三年八月十八日の政変が成功するくだりであるが、会薩両藩および追放直前の長州兵の軍装から一触即発の状況までが、実に詳しく記録されているのに驚かされる。余談ながら私は長編小説『落花は枝に還らずとも 会津藩士・秋月悌次郎』（平成十六年、中央公論新社）を執筆中、八月十八日の政変の章に至るや本書の記述をもっぱら参考にした。本書以上のレベルにある史料は、世に存在しないからである。

ついで「第七卷甲子記一」から「第十卷 甲子記四」までは、池田屋事件と禁門の変（蛤御門の変）の勃発した元治元年（一八六四）の出来事をほかの巻とおなじく編年体で記述しているため、新選組も登場する。このころ会津藩が国力を疲弊させつつあつたという事実の提示なども、同藩の内情に通じた者ならではの指摘であろう。ほかにも本書には、注目すべき点が少なくない。『孝明天皇記』にすら収録されていない、孝明天皇から諸方へ発せられた宸翰が多数紹介されていること。特に天皇が八月十八日の政変によって尊讓激派公卿が一掃されたことを喜び、容保にその忠誠の心を愛でて与えた宸翰の文面が初めて活字化されたことは、北原雅長の最大の手柄でなければならない。これによつて初めて、容保は明治以降の官製史観——いわゆる順逆史観の主張する賊徒などではなく、天皇のもつとも信頼厚い武官であったことが証明されたからだ。

なお右の宸翰が存在することは、つとにマツノ書店が復刻した男爵山川浩遺稿『京都守護職始末』（明治十四年十一月刊）でも明らかにされた。しかし『七年史』はそれより早く明治三十七年八月に啓成社から刊行されたばかりか、約五百頁の『京都守護職始末』に対して上下巻約二千頁のボリュームを誇っていた。その意味でこのたびの『七年史』の復刻には、いよいよ真打ち登場の趣がある。

ちなみに著者北原雅長は、会津藩家老神保利孝の次男に生まれ、やはり家老職たり得る名門北原家を継いだ人物である。長兄神保修理は、鳥羽伏見の開戦前夜、最後の將軍徳川慶喜に東帰を進言した責任を問われて切腹の主命を拝受。利孝もまた鶴ヶ城への籠城戦が開始された慶応四年八月二十三日、追手の甲賀町郭門が破られた責任を取つて自刃し、修理の妻お雪は大垣兵に捕われたのを恥として喉を突いた。

しかるに雅長は、神保利孝・修理の死を記述する際にもふたりが自分の親族であることに触れず、主情を排した筆法に徹している。『七年史』全二十巻に凛乎たる氣品が漂うのも、著者が「史料をして語らしめよ」の鉄則を良く守りぬいているからだ。

会津滅藩のうち工部省に出仕、秋田県権大属、長崎県少書記官、初代長崎市長を歴任した雅長は、官製の順逆史観に抗し、幕末の会津藩の立場を闡明するのに最適な文体を思案した結果、右のような筆法を選択したものと思われる。

「このような著作者の経歴からして、本書は同時代人の証言としても読むことができる」（『国史大事典』）

という評があるが、この「証言」が会津藩雪冤の書の嚆矢となつた点にこそ、本書の歴史的意味がある。

前述の啓成社版、その後出された復刻版（「続日本史籍協会叢書」所収の四冊本、臨川書店刊の二冊本）も入手困難な今日、堅牢美麗な本造りで知られたマツノ書店版が世に出ることは私の喜びとするところである。